

武道の宗教性に関する研究

酒井利信

Study on religion in Budo

Toshinobu SAKAI

I. はじめに

日本のみならず世界中で実に多くの人々が生涯にわたって武道に取り組んでいる。このことが武道の特徴の一つであるが、一歩踏み込んで考えれば人々をそうさせているところのものがある。武道をするには各々様々な動機、理由があるだろうが、大方のスポーツ種目とは大きく異なりこれを生涯続けるということになると、体力的限界を克服あるいは超越するという身体的技術的特徴もさることながら、武道によほど実践者を魅了する何かがあると考えべきであろう。それこそが武道の文化性であると筆者は考えている。武道の備える文化的独自性には様々な要素が考えられるが、大きく精神性の問題を第一にあげなくてはならないだろう。武道における精神文化史を、実践を踏まえた立場でしかも学術的に解明することが、当面筆者に与えられた課題である。

武における精神史を考える際、その宗教性は看過できない問題である。武道の宗教性という大きなテーマの中で、今回は特に原始的宗教形態である呪術について古代神話を題材として取り上げ考察した。

本研究は文献学のアプローチによるものであるが、文献的に取り扱うことのできる古代神話は、『古事記』や『日本書紀』といった記紀神話に限られる。テキストとしては基本的に岩波本『古事記 祝詞』『日本書紀上・下』『風土記』を用いた。

記紀神話において剣と弓矢は武の呪術を考える上で二大事項である。本研究は、記紀神話にみられる剣の呪術および弓矢の呪術についてその構造を明らかにし、更に両者の比較によりその特徴を明らかにすることを目的とする。

II. 剣の呪術

剣に関する呪術は、特に古代二大霊剣といわれる草薙剣と劔霊剣に関わる事項として顕現するものであった。

この草薙剣と劔霊剣に関わり、特に注目すべき「大蛇退治神話」「天孫降臨神話」「神武東征伝説」「ヤマトタケルの東征伝説」を取り上げ、剣の呪術について考察した結果、以下の点が明らかとなった。

① 剣の呪術性

② 剣と神との関係性

③ 剣の神々の世界である天上と人間界である地上を繋ぐ属性

剣は記紀神話の中で呪術性を有するものとして描かれている。霊剣の本質が呪術性にあることは確かであるが、その呪術の内容はというと辟邪ということになる。劔霊剣にまつわる「神武東征伝説」や草薙剣にまつわる「ヤマトタケルの東征」におけるモチーフは、一つに英雄に敵対する邪悪を排除することであった。剣をもって邪をさける呪術に関する記述は、この二つの霊剣以外にも記紀神話に散見される。この辟邪の呪術性は、剣の神聖性がベースとなっており、この神聖性の根拠は神との関係性にあった。この関係性が成り立つ前提として、剣は神々の世界である天上と人間界である地上を繋ぐ属性を有していた。つまり古代神話における世界観において天上と地上が精神的にはっきりと区別されるようになった段階でも、剣はひとり天上と地上を行き来できるものとして観念されていたということである。

記紀神話には、以上の観念構造が存在していた。

Ⅲ. 弓矢の呪術

弓矢の呪術は、「アメノワカヒコ神話」「丹塗矢神話」に顕著に窺われた。

記紀神話における弓矢の呪術を考察した結果、「アメノワカヒコ神話」から以下の点が明らかとなった。

- ④ 弓矢の呪術性
- ⑤ 弓矢と神との関係性
- ⑥ 弓矢の神々の世界である天上と人間界である地上を繋ぐ属性

つまり「アメノワカヒコ神話」からは、剣の呪術と同様の構造が認められたということである。

更に「丹塗矢神話」からは以下の点も明らかとなった。

① 丹塗矢は、丹塗の赤色が血液の呪的能力を意味し、元来の矢そのものの呪術性とあいまって更に強力な呪具となっていたのであるが、先学諸氏はあくまでもこれの辟邪としての呪術性を強調する。この神婚説話において、松村武雄の「出産の時に、ことに災をなすと信ぜられた邪霊を厭離する風習を反映するもの」¹との解釈には一理あるが、この丹塗矢伝説の主たるモチーフは辟邪ではなく、神の子の出生である。松村自身が赤色(血液)が生命や活力の標徴であることを指摘しているように²、丹塗矢はある面で辟邪とは反対方向の属性をもっており、生成と辟邪の二面的呪術性を有することに注意すべきであろう。丹塗矢伝説においては、辟邪の呪術性もさることながら、むしろ生成の呪術とでもいうべきものが指摘されるべきであるというのが筆者の見解である。

② 弓矢の神との関係性については、アメノワカヒコ神話において矢が神と伴に天降って来たことにより成り立っていたが、丹塗矢伝説においては神が矢そのものに身を変えて俗界に現れてきており、その関係性はより顕著なものとして描かれているといえるだろう。

③ 前提としての神々の世界である天上と人間界である地上を繋ぐ属性に関して、丹塗矢伝説は大きな特徴をもつ。丹塗矢は神の化身として川を流れて俗界に現れる。つまり他界は川の彼方にあり、神々のいる聖なる世界と人間のいる俗界は川によって結ばれている。剣の呪術においてもそうであったが、アメノワカヒコ神話において人間界である下界からみて神々のいる世界は上方にあり、

垂直方向に聖なる世界が設定されていた。しかし丹塗矢伝説では聖なる世界は水平方向にある。神話の世界観として、垂直方向の超越軸に対して水平方向の超越軸が設定されているということである。この水平方向にある他界と俗界を丹塗矢は川にそって繋いでいる。矢が聖と俗を繋ぐ属性を有することにおいて同様であるが、その超越軸の設定が水平方向であることに大きな特徴がある。

Ⅳ. おわりに

記紀神話における剣の呪術および弓矢の呪術において、剣と弓矢各々について①呪術性、②神との関係性、③神々の世界である天上と人間界である地上を繋ぐ属性、が明らかとなった。つまり記紀神話における武の呪術は、剣と弓矢、同様のものが認められるということである。

では全く同じかというそうではなく、弓矢に対する観念の独自性が丹塗矢伝説に顕著に現れていた。

まず、弓矢の呪術性として、辟邪の呪術の他に生成の呪術を指摘した。再度考えると「大国主神の根国訪問」の件における生大刀・生弓矢も、同様の意味を含んでいると考えることができる。この場合の「生」の語について、倉野憲司等は「生き生きとして生命の長いことの頌辞」³と註し、西宮一民は「活力がある意の美称」⁴と註して、辟邪が邪悪の死を連想させるのに対して生を示唆する。三浦佑之⁵や松本信広⁶、松村武雄なども、同様に生大刀・生弓矢について死に対して生の要素を指摘する見解を述べている。そもそも剣にはそういった性格が多少なりともあったと考えられる。火神被殺の件において、スサノヲが火神を斬った剣から様々な神々が化生する描写からもこのことが伺える。しかし記紀神話全体を通してみた場合、剣の呪術には辟邪の要素が非常に強いことは確かであり、これが特徴でもある。対して弓矢については、記紀神話における弓矢の観念を考える上で最も重要な件のひとつである丹塗矢伝説に主要なモチーフとして生成の呪術が顕著に現れることから、このことを弓矢の呪術性の特徴のひとつと考えることに間違いはないであろう。

次に、矢が聖と俗を繋ぐ属性を有することにおいてその超越軸の設定が水平方向であることを指摘したが、これは神話の世界観に大きく関係する。そもそも記紀神話は基本的に、高天原(天上)－葦

原中国(地上)－黄泉国・根の国(地下)、という垂直方向に立体化された世界観を前提に構成されている。刀剣の呪術については記紀神話に限ってみた場合、例外なくこの垂直方法の超越軸によってその神聖性が描かれている。従って、剣は天上と地上を繋ぐ属性をもって捉えられているのである。アメノワカヒコ神話における弓矢も同様であった。しかし、丹塗矢伝説において神は水平方向にある他界からやって来る。上田正昭は、完成された記紀神話では水平的他界観が垂直的他界観に変容したことを指摘している⁸。また吉田巖は、七世紀以降の大和の支配者が政治的意図のもとに作りあげた記紀神話では、水平表徴型は排除されたことを指摘している⁹。つまり元来、原始古代日本人の精神世界においては水平的他界観であったものが、政治的意図もあって垂直的他界観に変容したということである。古い水平的超越軸をもつ世界観に対し、新しい垂直的超越軸をもつ記紀神話的世界観ということがいえる。アメノワカヒコ神話において矢は天上と地上を繋いだが、これは新しく記紀神話的世界観によって作り上げられたものであり、元来矢の呪術は水平方向の超越軸によって観念されてきたものであると理解するのが自然であろう。つまり古い水平的超越軸を基にした矢の呪術に対し、新しい垂直的超越軸を基にした剣の呪術ということがいえる。時間的に剣に先立つ矢の呪術は、その水平的超越性に顕著であり、その原初的な姿が矢の呪術における最大の独

自性でもある。

最後に、その呪術性は弓ではなく矢のみに収斂していることを指摘した。その矢の属性は、丹塗矢にみられたように故意に赤色を付すことによって観念される属性も認められたが、矢が聖と俗を繋ぐことが大前提になっていたことから考えると、矢そのものの遠隔地に飛んで行くという性質にあると考えるべきではないだろうか。吉田巖は記紀神話の垂直的他界観は中国の天の思想が根本にあることを指摘しているが¹⁰、剣の神聖性はこの天の思想やそれに基づく星辰信仰あるいは道教といった中国の高度な思想体系の中でその属性が観念されてきた。それに対して、この段階での矢の呪術性は至ってシンプルな属性に根拠付けられているといえる。

注

- 1 松村武雄『神話学論考』 p.154
- 2 松村武雄『日本神話の研究』第四卷 p.741
- 3 倉野憲司他校注『古事記 祝詞』 p.98
- 4 西宮一民校注『古事記』 p.64
- 5 大林太良他『日本神話辞典』 p.246
- 6 松本信広『日本神話の研究』 p.133
- 7 松村武雄『日本神話の研究』第三卷 p.343
- 8 上田正昭『日本神話』 p.107
- 9 吉井巖『天皇の系譜と神話 二』 pp.116～117
- 10 同前、p.116